

## 平成 26 年度 第 1 回 学術情報ネットワーク運営・連携本部会議 議事要旨

日時：平成 27 年 2 月 19 日（月）15:00-17:15

場所：国立情報学研究所 19F 会議室

議事：

議事に先立ち、喜連川本部長から、学術情報ネットワークに係るこの 1 年の経緯とこれからの 1 年の動向等について、説明があった。また、長澤室長（陪席：文部科学省 学術基盤整備室）から、挨拶があった。

### 1. SINET5 の整備について

漆谷委員から、資料 3-1 に基づき、次期 SINET の整備計画について、合田教授（陪席：国立情報学研究所）から、資料 3-2 に基づき、大学でのクラウド導入・利用支援サービスについて、安達委員から、資料 3-3 に基づき、学術コンテンツ事業の今後の方向性について、説明があり、意見交換が行われた。

- ・ 研究・教育のワークフローに即した支援（研究データ管理・共有の支援）は、北大アカデミッククラウドも同じ方向性である。研究不正防止（例：日常実験データの保存）にも役立ち、大学の機能強化に貢献できる。
- ・ 先行大学の成功事例を規模・国公私を問わず全国にどう共有できるか。時期的な見通しを得るには、効果的なアーカイブ手法の他、人材・組織の検討が不可欠である。
- ・ 共通化可能なものは、競争でなく、圧倒的な効率化の対象とするべきである。大学（University）ならではの研究の幅広さに基づく知見をいただき、全国の大学・研究機関と共に考え共に創り上げたい（共考共創）。
- ・ 高エネ研：扱うデータ量は 3 Peta Bytes（近々に 1 桁増）である。解析時のデータ転送を考慮するとストレージと CPU は物理的近接が好ましい。国際実験では、CERN を中心に各国が分散してデータ共有・解析している。以前は装置の設置場所へ行く必要があったが、今は国を問わず同レベルで競争できる。この意味で、研究活動の基盤に係る常識が変化しており、クラウド化は必至で、研究者の期待も同様である。
- ・ 遺伝分野は計算資源も配備している、物理学分野は GRID に始まるクラウドの始祖である。計算資源が充分でない分野もあり、データ蓄積に加え、データ処理のインフラも重要である。研究不正防止の点では、時刻や記録の正しさの認証も重要である。
- ・ 核融合研：LHD 実験で得られた生データとは別に 1 次処理された物理データをクラウドに蓄積している。今後 ITER が稼働し始めると更に膨大なデータが流れる。シミュレーションデータに関しては計算機がある場所で 1 次処理することになる。研究不正問題については、LHD 実験の生データの半永久的保存が可能だが、シミュレーションデータに関しては処理方法が個人で異なるため、主プログラムの保存が必要となる。

- ・ 様々なサイエンスのニーズを共通的な枠組みでサポートできると良い。予算は各機関だが、NII がメタなバイヤーとなってバルク調達を行う等の方法もある。
- ・ クラウドは、事業者選定に加え、アプリへの踏み込みが重要である。クラウド化だけでは効率化にならず、財務会計・人事システムなどの共通利用までつながると良い。
- ・ ストレージの共有・セキュリティに加え、業務手順の共通化が必要である。現行踏襲、個別仕様、ベンダによる囲い込み等が少なからずあり、実際の変化につなげるには、相当な知恵が必要である。
- ・ ワークフローは、遺伝分野で先行している。事務も含め、分野間の知の共有が重要である。
- ・ 大学の文化・歴史の違いをどう吸収できるか、難しい課題である。
- ・ コスト削減は、機関を越えた横展開で期待できる。”area by area”で、各地域コミュニティ内の協力関係の中で、効果をエビデンシャルに示せると良い。

## 2. 企画作業部会報告

阿部准教授（同部会副主査、陪席：国立情報学研究所）から、資料 4 に基づき、活動報告（SINET5 アクセス回線共同調達、学術情報基盤オープンフォーラム開催）があった。

## 3. 認証作業部会等報告

岡部委員（同部会主査）及び中村教授（陪席：国立情報学研究所）から、資料 5 に基づき、活動報告（学認、電子証明書、eduroam 等）があった。なお、eduroam について、今後 NII 事業としてのサービス提供が要望として上げられ、安達委員より関係者と協議の上進める旨の回答があった。

## 4. 高等教育機関における情報セキュリティポリシー推進部会報告

曾根委員（同部会主査）から、資料 6 に基づき、活動報告（サンプル規程集の更新等）があった。

## 5. その他

喜連川本部長から、来年度の本部委員についてはあらためて依頼する旨の発言があった。

以上